

兒童心理學文獻抄 三

牛 島 義 友

子供の社會生活

て行くのである。

一人で遊ぶ云ふのは子供の遊び方ではない。家でみんなに止めても近所の同年輩の子供の所に出かける。兄弟で

もるない限り子供を家庭に閉ぢ込めておく事は正しいやり方ではない。否多勢の兄弟のある所でもその社會性を教養するには幼稚園に入れる事が最も好ましい。

子供は誰ミでも親しくなるが又子供程よく喧嘩するものはない。大人の眼から見れば子供の社會生活は實に危機に類した今にも爆發しさうな状態を絶えず繰返して居る。併しさうはらくする必要はなく、入らぬお節介は差控えた方がよい。子供の社會は大人の社會と本質的に異なる。子供はその毎日の遊びや争ひに依つてその社會性が陶冶され

ウィスリッキ、幼稚園児の社會的行動の觀察(S. Weis-

litzky: Beobachtungen über das soziale Verhalten im Kindergarten Zeit. f. Psychol. Bd 107 1928)

ウィーンのさる幼稚園、此處には三歳から六歳迄の三十六名の幼児が遊んでゐる。彼等の親は下層階級に屬してゐる故に、日本ならば託兒所の子供と對照させて讀んで行かれ度い。

子供達の社會關係は非常に流動的である。ある遊び友達の關係が出来たかと思ふと直ぐ毀れてしまひ、年長の兒童達に見られる様な強固な社會關係なきは存しない。三回に互り合計三時間子供の自由時間の様子を觀察して見ることを間に全部で一七三のグループが出来、一時間に五十八組

出来る割合である。三十六名で五十八組であるから一人が一時間に平均一・六組に屬する事となる。同じグループが一時間以上も續いて一しよに遊んでゐるに云ふ事はなく、その間に子供はぎんぐ入れ代つたり、或ひは解散してしまふ。

此の一七三組のグループの構成状態を見て見るに次の如く二、三名から出来てゐる者が半数以上もあり、餘り多人數の仲間はない。十人以上が組になる事は全く見られなかつた。中には一人ぼつちで遊んでゐる子供もゐるが、(表の中の一名に云ふもの)之はごく年少の場合にのみ見られ、六歳の子供には斯る獨行者はゐなかつた。之によつて見るに子供達は充分社交的であり、常に誰か遊んでゐる。孤獨を好むに云ふのは青年期に至つて初めて現はれる現象である。

組	一名	二名	三名	四名	五名	六名	七名	八名組
%	一〇	三六	二二	一六	五	五	五	一

次に如何なる動機で此のグループが成立するかを調べて見たら大體三種類を區別する事が出来た。

一、物を中心とした組の組成—玩具、人形、鞠等が子供を結び付ける媒介物となり、之がある間は一緒に遊んでゐるが、之がなくなるに解體して他の仲間に行つてしまふ。

二、活動を中心にした組の組成—一人の子が走り出すに他の子もそれについて走り廻つたり、一人が歌を歌ひ出すに他の者も之に和して歌ひ乍ら遊ぶに云つた風に、同じ動作が活動を中心として組が出来ることがある。

三、人的接觸による組成—之に云つた活動もなく又中心となる玩具もないのに數人の子供が一緒に寄つて話したり何かしてゐる事がある。此の會話は樂しげに續けられる事もあり、又口論になる事もある。併し斯るものはごく僅かであつて而も年長の子供にのみ現はれる。大部分の者は初めの一、二のやり方で組を作つてゐる。

新參者は子供の社會からも敬遠される。併し特にいぢめるに云ふ譯でなく、只無視して自分達達が樂しさうに遊んでゐる。此の事を新參者の方も大して氣にしないで、玩具等を持つて一人で遊んでゐる。かう云ふ状態が普通三日間位續く。併し時によるに敵意を以ていぢめられたり、一寸

した失敗をしてもひさく皆からいぢめられる事もある。新
参者が元からの者との接觸する様になるのは多く偶然の機會
から起る。例へばボールが新参者の方のところに落ちて行き、
彼がそれを拾つた云ふ事から彼がそのボールの組に入る
事が許可されたり、或ひは新参者の持つてゐる變つた玩具
に他の者が注意する云ふ事から接近したりする。

以上の様な子供の社會は多く單なる群であるが、時には
上下の關係が出来てゐる場合もある。さう云ふ場合の指導
者になる子供は繪がうまいとか、話が上手とか、運動上
手、或ひは先生からいつもほめられ、模範とされる様な優
れた才能のある子供である。そこで彼は小さな暴君となり
權力をふるつてゐる。例へば或る時なき皆が戸外で遊んで
ゐるのに自分一人室に残つて居り、「俺と遊ぶ者にはチヨ
コレートをやるぞ」と嘖鳴つた。それで二、三人の子供が
彼の所に走つて來たのに對し彼の云ひ草は「チヨコレート
と聞いてやつて來たのだらう。そんな奴は行つちまへ」と
云つた調子である。

ヘツツェルによる三歳から六歳までの子供は常に自分

より年長の子供の指導の下に遊んでゐるが、七歳位になつ
て初めて同じ年輩の子供を指導者に仰ぐ様になるこの事
である。

次に此の子供の社會生活に屢々現れて來る争ひに就ての
研究を述べよう。

ジャーシールド及びマーキイ、學齡前兒の争ひ (A. F.

Jersild and F. V. Markey: Conflicts Between Preschool
Children, 1935)

ニューヨークのナースリイ・スクールや幼稚園の五十四
名の幼兒に就て觀察する。自由の時間に一人の子供を十五
分間詳細に觀察しつゞける。斯る十五分間觀察を一人の子
供につきそれ／＼十回宛行ひ、その結果から子供の争ひ喧
嘩と云ふ少し大げさになるが、二に角二人の子供の間が
敵對的關係になつた場合を觀察する。例へば他人の物を取
らうとしたり、言葉や身振りで威したり、無理に命令した
りするやうな争ひの場面を見る。その結果全體で一五七七
回の争ひが見られたが、之は一人平均三〇・九回となり云
ひ直すと一人の子供は五分毎に一回の争ひをしてゐる勘定

になる。一つの争ひの平均の繼續時間は三十秒である。

此の争ひの数は人々によつてちがひ、最も多い者は一回、最も少ない者は十七回である。又此中七〇回も自分から進んで他を侵すやうな横暴な者も居るに對し、只三回しか積極的に出ない云ふ弱氣の子供もゐる。

是等の著しい數から見ると子供の社會生活は絶えず調和を缺き、波瀾を引起してゐる事が分る。併しその波は非常に小さく親が牛を出す必要のない程度の子供の喧嘩である。

此の争ひは年が進むに従つて減る(次の表に見られる如く)。尤も泣いたり叫んだりする事は減るが口論等は増して居る。即ち争ひの形が變化して來るのである。

同年齡同志の喧嘩が多くて年長と年少との喧嘩は割に少ない。男女別に見ると殆き差がない。併し男の方が女よりも積極的で、又その争ひの結果は男の方が勝つ。年長になるに男はさかく手をふりたがるに對し女は口を以て争ふ傾向がある。併し二歳位の所では男女の區別は全然見られない。

喧嘩の状態を次に表示するが、之は十五分間に於ける平均の現れである。「打つ」は相手を打つたり、かみついたり、耳を引張つたり、等の行動を含み、「引たくる」は相手の持つてゐる玩具を取るのであり、「口論」は「それをくれ」さか、「之は私のよ」さか、「止め」さか、「いや」さか云ふのを指し、「悲鳴」はその結果上げるものである。

	二歳	三歳	四歳	五歳
争ひ數	3.4	3.4	2.4	1.8
打つ	1.5	1.5	0.88	0.63
ひつたくる	1.9	2.1	1.4	1.0
口論	0.36	1.3	1.7	1.0
悲鳴	1.2	0.61	0.48	0.11

子供の智能と喧嘩の状態との關係を見るに大した關係はないが、大體言葉を用ひる類ひのものは智能の高い子供に多い。併し斯る智能よりも、社會的環境の影響の方が著しい。比較的下層の者の子女

が入園して居る所では争ひの數が多く、而も下等な言葉を使つたり、唾を吐いたり、組付いたりする。

又先生の數の多い行き届いた所では争ひの數は少ない。こゝでは先生は子供の間に争ひが起るを直ぐ止めに行く。

併し多くは子供が既に止めた後にかけてける様な次第である。先生は子供の争ひに對して一方を叱り、他をいたはる。云ふ態度を取る。斯る場合に時には子供は先生に對して争ひの態度をさる事がある。之は餘り先生が子供の争ひに干渉しすぎる爲らしい。云ふのは先生との争ひが最も多かつた幼稚園は實は子供同志の争ひが一番少ないにも拘らず先生が最も多く干渉した幼稚園であつた。次に斯る子供同志の争ひの起る主要な原因は、他の子供の持つてゐる玩具をほしがつたり遊び場所を横取りしたがる物である。子供が玩具を見るにそれがほしくなり、いきなり手を出してしまふのである。そのくせ相手から取上げてしまふとも興味がなくなり放つてしまふ云ふ事すらある。その他少數ではあるが行動の自由を妨害された時にそれを除かうとして争ふ場合もある。尚その他初めは遊戯的にやつてゐた動作から争ひに移る事もある。

彼等の争ひの程度は弱く根深いものでない事は前にも述べたが、繰返してなぐつたり、倒れたり、泣いたりした後でもなぐつたりする云ふ事はない。又複雑な行動即ち

相手がうつかりしてゐる時に襲ふ云つた様な事は殆どない。又永続的な遺恨を感じる事もない。兄弟同志の場合には案外に永続的な敵對感情があるものであるが、彼等の間には見られなかつた。併し彼等でも一日中同じ環境に置かれたり、或ひは教師が子供の間の競争を刺戟したり、教師が子供に餘りに親密な關係を結ぶと他の子供等が嫉妬を感じたりして兄弟の場合の様な反目の起る可能性がある。併し普通の幼稚園には斯る事は見られない。又二人の子供が組んで一人の子供を襲ふ様な事もあるが、併し此の攻守同盟はその場限りのもので永続するものではない。

以上の如く子供の社會生活は大人のそれと全く趣を異にし、社會生活を求むるが、相互の結合力は弱く、流動的であり、争ひに富んだ不調和な生活である。併し斯る不斷の相互作用の中から強固な社會意識が生れ、調和的な人間が構成されて来る。